

divism が 17 例, Biliary が 14 例, Familial が 15 例, その他 10 例. 実施手術は膵全摘 105 例 (77%), 亜全摘 21 例 (15%), DP10 例 (7%). 膵全摘, 亜全摘の全例で膵摘出後血糖上昇を認めインスリンを開始. 膵島はほぼ全例が系門脈的に肝に移植. 疼痛に関しては 105 例中 68 例 (65%) 治癒, 22 例 (21%) 改善, 15 例 (14%) 不変, 増悪はなし. 膵内分泌機能は膵全摘 41 例中 14 例 (34%) が insulin independent, 14 例 (34%) が intermittent exogenous insulin use (尿中 C-peptide 陽性), 13 例 (32%) が insulin dependent. それぞれの平均膵島取量 (IEQ/kg) は 5118 ± 687, 3064 ± 356, 1239 ± 413 ($p < 0.02$).

【結語】難治性疼痛を主訴とする慢性膵炎に対して, 膵 (亜) 全摘は有効である. その際, 自己膵島移植は膵内分泌機能改善に有効であり, 考慮すべき術式と考える.

14 当院で経験した, 膵十二指腸動脈瘤の 2 例

森 茂紀¹⁾・佐藤 聡史¹⁾・大崎 暁彦¹⁾
菅原 聡¹⁾・諸田 哲也²⁾・佐藤 攻²⁾
森田 俊³⁾・木村 格平³⁾・加村 毅⁴⁾
野本 実⁵⁾
信楽園病院内科¹⁾
同 外科²⁾
同 病理³⁾
同 放射線科⁴⁾
新潟大学大学院医歯学総合研究科
消化器内科学分野⁵⁾

〔症例 1〕46 才, 男性. 急激な腹痛, ショックにて発症. CT にて膵十二指腸動脈瘤破裂による後腹膜血腫の診断となった. CT にて動脈瘤の増大を認め, Coiling にて治療した. 術後十二指腸狭窄をきたし, 改善まで約一ヶ月を要したが軽快した.

〔症例 2〕61 才, 男性. 偶然に CT にて膵十二指腸動脈瘤が発見され, 血管造影検査を行った. IVR より手術が選択され, 動脈瘤切除術が施行された. 組織学的に, 当初は動静脈瘻のような病態と診断されたが, 検討にて, 変性し動脈壁構造が破壊されたことによる動脈瘤の診断となった. その動脈瘤の形成には, 動脈硬化以外の原因による

中膜変性が関与していると考えられた.

治療方針の決定, 発生原因について示唆に富む症例と考え報告する.

15 脾静脈閉塞に伴う胃静脈瘤の 4 例

横尾 健・古川 浩一・和栗 暢生
河久 順志・濱 勇・相場 恒男
米山 靖・杉村 一仁・五十嵐健太郎
月岡 恵

新潟市民病院消化器科

【緒言】左側門脈圧亢進症は稀な病態であるとともに多様な背景疾患を有する. 当院では脾静脈閉塞に伴う胃静脈瘤 4 例を経験した.

〔症例 1〕吐血にて搬送され精査の結果, 慢性膵炎による脾静脈閉塞, 胃静脈瘤破裂と診断. 脾摘出術, 胃部分切除を施行.

〔症例 2〕以前より血小板増多を指摘されていた. 検診を契機に脾静脈閉塞に伴う RC サイン陽性の胃静脈瘤と診断. 予防的に脾摘出術, 胃上部血行遮断術を施行.

〔症例 3〕重症急性膵炎後の脾静脈閉塞. 未治療にて経過観察中.

〔症例 4〕膵癌による脾静脈閉塞例. 診断 14 ヶ月後も ADL 良好だったが胃静脈瘤は増大傾向あり, PSE を施行.

【結語】診療に際しては個々の病態を多角的に検討し対応するべきである.

Session V 『術後管理』

16 肝門部胆管術後に難治性腹水を認めた 1 例

丸山 智宏・河内 保之・高橋 元子
石川 卓・内藤 哲也・西村 淳
新国 恵也

厚生連長岡中央総合病院外科

症例は 76 歳男性で黄疸の精査で入院となり, 肝門部胆管癌と診断された. また, 術前検査で施行された上部消化管内視鏡検査で噴門部に 1 型進行胃癌を認めた. 右三区域切除が必要と考えられ